1.2 自然再生の対象となる区域

対象区域は、静岡市街地（県庁、市役所付近）の北部に位置し、麻機遊水地として整備が進められている。第 3･4 工区は概成し、現在は第 1 工区の整備を行っている。

自然再生全体構想では、比較的良好な湿地環境が残る第 1 工区（約 22ha）、第 3 工区（約 55ha）、第 4 工区（約 32ha）の総面積約 109 ha を自然再生の対象区域（図 1-2）とする。

図 1-2.自然再生の対象区域（H17.9.17 撮影）

1.3 地形および地質

1.3.1 麻機遊水地付近の地形

図 1-3.駿河湾上空から眺めた静岡平野（H17.9.17 撮影）

麻機遊水地は静岡扇状地平野の北縁に位置し、静岡平野の中心部にある賤機山南端部が海岸から 10km、標高が 28m あるのに対し、麻機遊水地周辺の標高はわずか 7m 前後である（図 1-3、1-4）。北側に迫る山地は、賤機山、竜爪山をはじめ南北性の尾根がのびるフォッサマグナ新第三紀層の山地である。

静岡平野の中に突出している谷津山、八幡山も同様の山地であり、北方山地の尾根の一部が平野の上に現れ、このような山地は沈降山地と呼ばれ全国的にも珍しい。

また、南東には日本平（有度山：標高 307m）の高まりがあり、有度丘陵を境に西側を静岡平野、東側を清水平野と呼んでいる。静岡平野などの等高線を見ると、賤機山南端を中心に同心円状になっている（図 1-4）。これは、静岡平野が安倍川の扇状地にあたり、安倍川の流れは賤機山稜を抜け多くは海方向に流れるが、ときには東や北東に流れ静岡平野が形成されたためである。麻機低地は、この安倍川扇状地の北東側末端にあたり、以前は安倍川の表流水は麻機低地にかなり流れ込んでいた。このことは静岡平野から巴川に流入する水系（図 1-5）からも確認できる。

また、安倍川の表流水や伏流水により、かつての巴川の水量は豊かであり、清水湊から静岡の城下町まで水運の便があったことも想像できるが、現在は安倍川からの表流水の直接的な流入がなくなったことや、静岡市街地で地下水の利用が盛んに行われていることなどにより、そのような姿は見られなくなった。

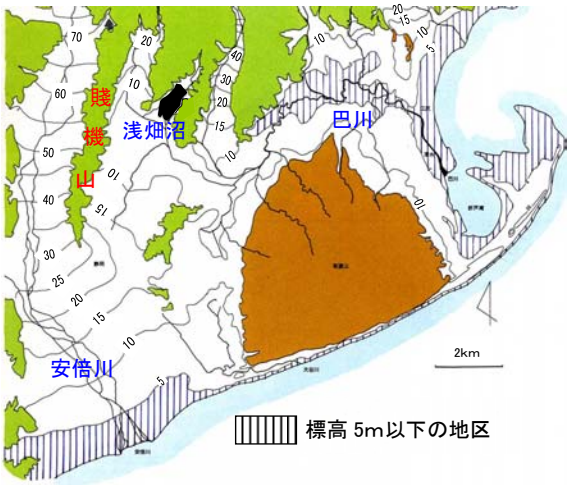

図 1-4.明治 20～22 年(1887～89)陸地測量部
地形図(清水・久能山・美和村・静岡)
資料提供：土隆一氏

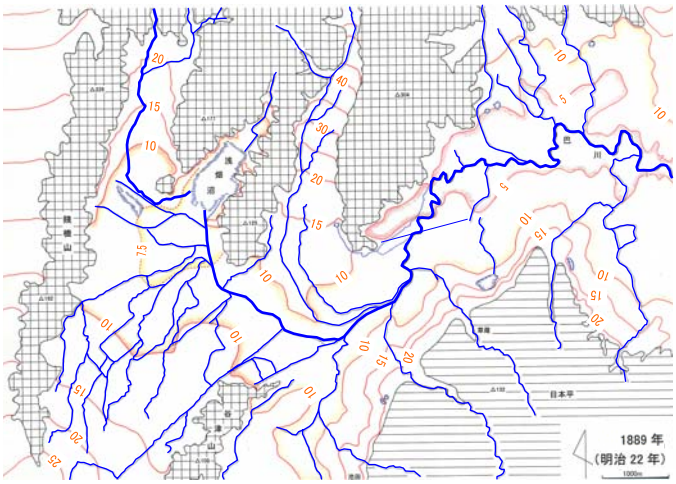

図 1-5.浅畑沼周辺の等高線(5m毎)と巴川の水系
資料提供：土隆一氏

1.3.2 麻機遊水地付近の地質

麻機地域の表層地質は、図 1-6 に示すように主に泥層からなり、その周辺は泥砂礫互層となっている。泥層が見られる地域は、安倍川扇状地の末端にある浅畑沼や大谷のほか、長沼、小鹿地区や浅畑沼から清水平野へと通じる巴川流域に多く見られる。

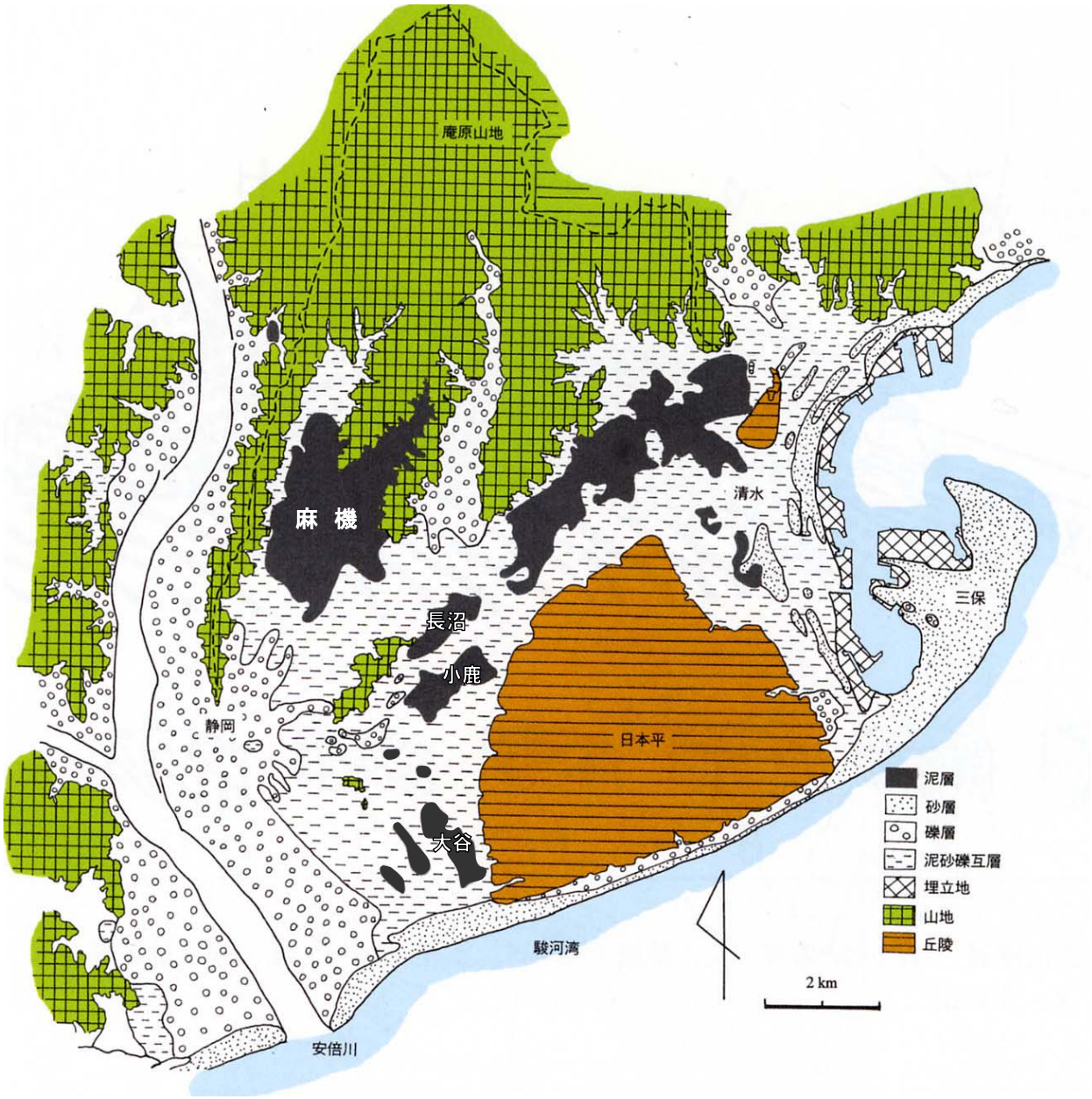

図 1-6.静岡・清水平野の表層地質図
（表層 5mに優占する地層で示す：資料提供：土隆一氏、1996）

1.4 流域の歴史

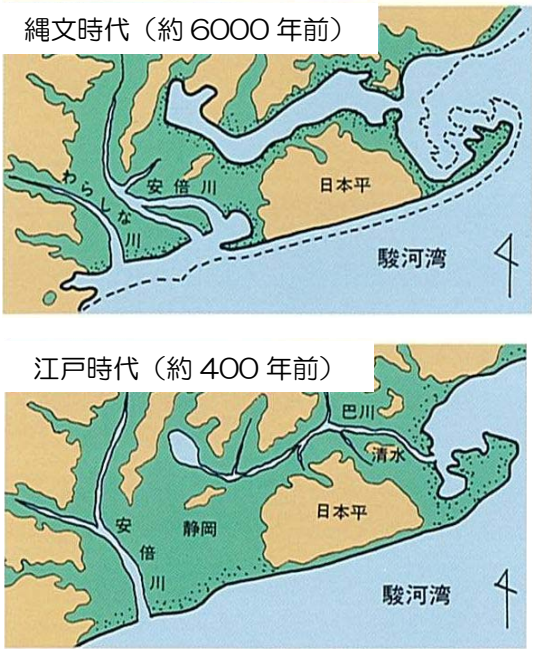

図 1-7.縄文時代と江戸時代の巴川流域
出展：私たちのくらしと巴川

巴川周辺は、縄文時代前期（約 6000 年前）には現在より海水面が 4~6m高く、清水から麻機に至る奥深い入江であったが、弥生時代以降はほぼ現在の海水面となり、低地が形成されたと言われている。これにより、安倍川本川からの地下水が清水方面へ流れるようになった。

江戸時代には、徳川家康（とくがわいえやす）によって駿府城（すんぷじょう）が築造されたが、その際、石材は巴川を輸送路として舟運により駿府へ運びこまれた。

また、駿府の城下町整備にあたり、洪水被害から町を守るために安倍川の河道を固定したことにより、安倍川との表流水でのつながりが断たれ、巴川の水量は減少した。

1.5 麻機の歴史

図 1-8.明治 22 年に公表された最初の地図
出典：上土誌

現在の第 3 工区付近には“浅畑沼（あさはたぬま）”と呼ばれた沼地が存在し、周辺には“小沼（こぬま）”や“武平渕（ぶへいぶち）”と呼ばれた沼地が散在していた。

巴川流域では戦国時代が終わり、世の中が安定してくると、人口が増加し新田開発が行われるようになった。低地を流れる巴川は、合流する川から排出される土砂がすぐに堆積し、水流が滞って周辺の土地が冠水した。とりわけ麻機地域は水はけが悪く、ひとたび大雨が降り土地が冠水すると何日も水が引かず、稲は腐ってしまい「麻機の水田は 10 年 1 作（といち）」と言われた。

巴川の治水・利水の整備は、流域のさらなる発展に不可欠であったことから、江戸時代以降には流域の村々などにより、巴川の大規模な浚渫や河道の改修工事が続けられてきた。

大正時代には、上土（あげつち）付近まで河川改修が進み麻機地域の排水は格段に改善され、戦後には食料増産を目指した土地改良事業によって、同地域は良好な水田として整備され、徐々に沼はその姿を消していった。

一方、昭和 40 年から 50 年頃の高度成長期には、巴川流域では市街化が進み、台風などの大雨による浸水被害が頻繁に発生した。特に昭和 49 年 7 月 7 日から 8 日にかけて発生した「七夕豪雨」では、甚大な被害を記録し、このことが巴川流域の総合治水対策への取り組みの契機となり、現在の麻機遊水地が誕生した。